Phantom Quest SpinOff-04.

［過保護すぎる執事の話］

恐る恐る近づけた私の人差し指をきゅっと掴んだのはプニプニの手のひら。あったかくてくすぐったくて、甘い匂いにくらくらした。私の最初の記憶―…。
「ボニートぼっちゃん…」
その名を口にしたのももちろんその時が初めて。
目の前の愛しすぎる天使が微笑んでくれたのは私の気のせいではないですよね？

…という随分昔のことを、まさか今思い出すとは。
今、私の目の前にはぐーすか寝ている坊ちゃん。無防備にも程があります。だらしなく空いた口からはもちろん涎が垂れているし、うっすら半目なのはいつものことだし、ほっぺたはつやつやと赤くて美味しそう…あ、いや、話が逸れましたね。とにかく爆睡中の坊ちゃんの姿を見て、何故だか私の脳裏には出会ったあの日のぼんやりとした記憶がよぎった…のですが、感傷に浸っているわけにはいきません。本日は朝から予定が詰まっているのです。
「坊ちゃん。…坊ちゃん！！」
くーっ　すかーっ
「そろそろ起きてください」
くーっ　すかーぁっ
起きる気配は全くない。私は一つ息を吐いてとっておきの一言を。
「坊ちゃんの階級は、シ」
「リアーン！！！」
効果覿面。
本日はまた芸術的な寝ぐせですね。坊ちゃん。
「…おはようリアン」
大きな欠伸を一つ零した後のポヤポヤした声もいつものこと。
「おはようございます。坊ちゃん」
坊ちゃんの一日の始まりを完璧な笑顔で迎えることは私のこだわり…なんてこと坊ちゃんは知る由もないでしょうけど…。

×　×　×

「プラニー遺跡？」
「長い間謎だとされていた隠し扉が見つかったという噂を聞いたんだ」
「ドゥエリポルタですね」
「そう。そのドゥ…なんとか、だ」

坊ちゃんは幼いころからトレジャーハントに大変興味を持たれ、『冒険』や『財宝』に目がありませんでした。
「『驚異の速さでA級に上り詰めたトレハン界の期待の新星ジーニが偉大なる扉を開けた！』とテラタイムズには載っていましたね」
「その偉大なる扉を見に行きたい」
「観光ですか？」
「クエストだ！」
「……」
坊ちゃん。わかってますか？
つい先日のクエストで謎が解き明かされたプラニー遺跡ですよ？　間もなく観光地として賑やかさを増すような場所に再びクエストが組まれるわけがないでしょう？　それに何より…あなたはまだ14歳でもちろんトレハン組合に登録もしていないってこと、お忘れではないでしょうね？
「私はクエストに行くぞ！」

私と坊ちゃんの初めてのクエストは、クエストとは名ばかりの『既に解き明かされた遺跡を巡るほぼ観光じゃん！でも坊ちゃんがクエストと言い張るならそれはきっとクエストです』という初級レベルにも満たないものでした。（旦那様の力を借りて組合から承認をもぎ取ったことは坊ちゃんには内緒ですよ）坊ちゃんにとっては組合から正式に承認された「クエスト」に参加することに意義があったのです。適当に見えて割と律儀なところは旦那様譲り。その為の労力など決して惜しくはありません。（それ以前に規定年齢に満たない…というのをうまいことやるのにも骨が折れました。内緒ですけど）

「これが偉大なる扉かぁ」
「いえ、坊ちゃん。ドゥエリポルタはもう少し先ですよ」
「…そうだった気もするな」
そう言ってずかずかと先に進む坊ちゃんの後姿は実に愛らしく…いや、その…、まあ、そんなやり取りも今思えば、懐かしい良い思い出です。

×　×　×

「リアンどうした？」
少し鼻にかかった坊ちゃんの声が眼下から聞こえハッとする。
そういえば坊ちゃんの髪の毛を結っているところでした。…いつもよりも編み込みすぎてしまったことはお許しください。
「何か考え事か？」
心配そうに見上げてくる曇りのない大きな目。
「いいえ、大丈夫ですよ」
「それなら良いが」
「昔のことを、少し思い出しておりました」

「昔のこと？」
「はい、坊ちゃんと参加したクエストのことです」
「懐かしいな」
「はい」
「リアンの一番の思い出のクエストはどれだ？」
「…私の、ですか？　そうですねぇ…」
私は思いを馳せる。
「ミーラー遺跡の用水路探検クエストか？」
あれは社会科見学レベルの平和なクエストでしたね。坊ちゃんが石の隙間にすっぽりはまってしまって、救出しているうちに全体のクエストが終わっていたという…大変思い出深いクエストです。
「見晴らしの丘の鍾乳洞のクエストか？」
あれは…今では笑い話ですが、なぜかコウモリに懐かれてしまった坊ちゃんの頭に止まって離れなかったコウモリが新種だったことが判明。財宝ではなかったですが貴重な発見を手伝ったと評価されて、見事のＣ級に昇級するという…確かに特別なクエストですね。
「私の一番の思い出のクエストは…」
「うん」
私を捉えて離さない大きな目が興味津々だと物語ってくる。
私は―…　坊ちゃんの目が不安に揺れたあの日のことを、忘れることができません。

×　×　×

王国がトレハン業界の後ろ盾となる前、『トレジャーハント』は貴族たちの趣味娯楽の一つだったとも言えるでしょう。狩りと同じように、一種の嗜みとして遺跡などを巡り財宝を探すことに熱中した方々は多かった。その際、本物のトレハンたちが護衛や案内役として雇われていたのです。組合からの報酬や保証制度などが整っていなかった頃のトレハンは貴族たちに名を売ることで生計を立てていたと言っても過言ではありません。そんな無法地帯でしたので、品位の低い方もたくさんいらっしゃいました。
あれは５年と半年程前。まだ坊ちゃんが初級、私が一足先にＣ級になっていた頃です。
それまでは初級かＣ級レベルのクエストに数回参加した程度でしたが、坊ちゃんが「少し難しいクエストにも挑戦してみたい」というのでＢ級の新規クエストの説明会に参加しました。
その時に目をつけられていたのでしょう。
実際のクエストが始まって間もなく、坊ちゃんと私はまんまと魔の手に引っかかってしまったのです。

「…ってて…」
右足がズクンっと痛み、熱を持っていることがわかりました。
「捻ったか…もしくは」
骨が…。いやそれよりも大事なのは坊ちゃんの安否です。
「坊ちゃん！！　坊ちゃん！！」
擦り傷だらけの体を起こしながら、遥か頭上に問いかけてみると、「リアーン！！」と泣き声に近い坊ち

ゃんの声が聞こえ、私は心底ほっとしました。
「すぐにそちらへ行きますので、そこを動かないでくださいね！」
そう言ったものの、この足でこの急斜面を登れるのかはわかりませんでした。
「…ちっ」
思わず舌打ちがこぼれたことに苦笑しました。坊ちゃんの傍にいることが自分の品位を保つ要因であることは重々承知しています。
本音を言うと口にするのが憚れるような汚い言葉が喉元まであがってくることもしばしば。それを柔らかい綿でふんわりと包み、品というリボンを結んで言葉にしている。…なんて坊ちゃんには口が裂けても言えませんけど。
断っておくと、その（口にすることはない）罵詈雑言は決して坊ちゃんや旦那様や奥様に向けられるものではありません。坊ちゃんを取り巻く虫けらのような奴ら…いや、失礼。いるんですよ。ハイエナのように坊ちゃんに近づこうとする下品な者どもが。そういう奴らに対して、私は心の中でドロドロとした呪いのようなどす黒い思いを湧き上がらせるのです。視線だけにその片鱗を漂わせ黙らせることで、それ以上坊ちゃんに近づかせない。…それが私のやり方です。それさえも通用しない鈍感で程度が低すぎる輩には（坊ちゃんに見えないところで）実力行使に出ることもありますよ。その為に日々の鍛錬を怠ったことはありませんので。
さて、そんなことよりも今問題なのは、このズキズキと痛みを増す足で坊ちゃんの元まで登れるのか？ということですね。
右足に体重を掛けてみる。
「…っつ」
最悪だ。思ったよりも痛みがひどい。
その時、ズザザザザ…という草木が薙ぎ倒される音と共に頭上から転がってくる《何か》。
「…え。…坊ちゃん!!!!」
文字通りごろごろと転がり落ちてきたのは紛れもなく坊ちゃんでした。身体を丸めてボールのように私に向かって一直線で転がって来るではありませんか。受け止めなくては！と思ったときに体は動いていました。どう考えても右足を踏ん張るしかありません。
「…うっ。…っつぅ…」
…痛い。痛いです。坊ちゃん。
更に数メートル下まで二人で転がり落ちたところでやっと止まることができました。
「大丈夫か？リアン！！」
耳元で叫ぶ坊ちゃん。
うるさいですよ。こんなに近いんですからそんなに大きな声を出さなくても。
私が目を開けると坊ちゃんはぎゅうと抱きついて、
「よかった！！無事だな！！」
…うっ。これは左腕も何かしら痛めたようですね。坊ちゃん…ちょっと腕の力を弱めていただいてもよいでしょうか…。
「坊ちゃんは大丈夫ですか？」
すくっと立ち上がって手や足をぴょこぴょこと動かし、ぴょんぴょんっと跳ねてみせる坊ちゃん。

「うん。全然大丈夫だ！」
ドヤ顔も健在のようですね。
「…ふっ。それは何よりです」
本当に何よりです。さすが坊ちゃん。
一向に立ち上がろうとしない私に坊ちゃんが心配そうに覗き込んできます。すみません。少し待ってもらえますかね。もう少しすれば痛みにも慣れて動けるようになるかと。
「……！」
思わず息を飲んだのは、坊ちゃんの手が私の人差し指を掴んだから。
「痛いのか？」
大きな目が私を見つめてくる。プニプニとした手。あったかくてくすぐったて甘い匂い。
ああ…。もう…。
「助けを呼んでこよう」
そんなこと言って、迷子になるのがオチですよ。
離されそうになる手をつなぎとめるように私はその名を呼びました。
「坊ちゃん！……」
「なんだ？」
「もう少しだけこのままでもいいですか？　ちょっと休めば動けますから」
「…そうか？　わかった」
納得した坊ちゃんは私の横にちょこんと座った。
この瞬間のための痛みなら悪くない、なんて思ってしまう私は重症ですよね。はい。自分でもわかっていますよ。でも、いいじゃないですか。
「初めて坊ちゃんと出会ったとき…」
「うん」
「坊ちゃんはまだ生後 1 か月くらいで、こんな風に私の人差し指をぎゅっと握って、なかなか離さなかったんです」
「母上からも聞いたことがある。生まれた時から私はリアンに懐いていた、と」
坊ちゃん、どうしてそこで渾身のドヤ顔なんですか？…（笑）
「私はこの方にお仕えするのだ。と父に教えられ、私はたまらなく光栄で嬉しかったんですよ」
「お前もまだ小さかっただろう？」
「はい。5 歳になったばかりの頃です。でも確かに思ったんです」
木漏れ日が翳りを見せ始めた。
「さて…、そろそろ戻らないと日が暮れてしまいますね」
痛みは少し麻痺したらしい。これなら動けなくはない。
「大丈夫ですかぁー？？」
遠くから聞こえてくる声。木々を掻き分けて顔を覗かせたのは、まあるい眼鏡が特徴的な青年だった。
「よかったぁ。無事で何よりです！　あ、トレハン組合研修中のルプスと申します。先ほど転落したと報告を受けて…、お名前を確認してもいいですか？」
「ボニート・ルーカスだ」

「リアンと申します」
「歩けますか？　肩をどうぞ。ここを少し行くと組合のベースキャンプがあります。そこで手当をしましょう」
「助かります」
私はルプスさんの肩を借りてゆっくりと進む。心配そうにちょこちょことついてくる坊ちゃんがこれまた可愛くて…、あ、いや、でも可愛いのは本当なんです。
「実は…上に罠が仕掛けられていました」
言いにくそうに切り出したルプスに私はうなずいて返しました。
「ええ、張られたロープに気づいた時には遅くて…、坊ちゃんを突き飛ばした反動で私が転落してしまって…」
「偽の登録で紛れ込んでいたトレハンがいたようでして、今組合の者が捜索に当たっています。実はクエストに参加される貴族の方々の所持品が狙われるというケースが最近多発してまして…。警戒はしていたのですが、…すみません」
「いえ、私の方も油断しておりました」
「捕まえたら問いただし、然るべき処置を取らせていただきます。…時間はかかるかもしれませんが、しっかりとした体制を整えていきますので」
その青年の目は真っすぐで信用できると思いました。
「はい。ありがとうございます」

ベースキャンプに泊まらせていただくことになったその夜。
「リアン…」
振り返ると不安そうな大きな目が揺れていた。
「どうしました？坊ちゃん。眠れないんですか？」
坊ちゃんは何も言わずに私の隣にちょこんと座った。
「…今になって、怖くなった」
「え？」
「お前が無事で、良かった…」
「……はい」
「やはりＢ級のクエストはレベルが違うな」
「そうですね。まあ、今回のことに関しては目をつけられて運が悪かっただけとも言えますが…」
「来月の…」
「参加してみたいと言っていたA+級のクエストですか？」
「…どう思う？」
「どう、とは？」
「いくら上の級のクエストへの参加は可能だと言っても…」
「臆病風に吹かれましたか？」
「…いや、別に…それは…その…ほら、リアンの怪我のこともあるし…」
「(笑) …。どうやらただの捻挫のようですし、来月のクエストまでには完治できるでしょう。私は、坊

ちゃんが行くと言うならついていきますし、やめると言うのではあれば従いますよ」
「……」
「怖さを知らない人間は決して強くはありません。私は、怖いという感情はとても尊いものだと思っています。怖さに疎くなってはいけません」
坊ちゃんはいつになく神妙な面持ちで私の言葉に耳を傾けている。
「坊ちゃん。…一つ聞いていいですか？　坊ちゃんは不注意で転がり落ちてしまったのですか？　それとも…」
「はっきりとは覚えていないんだ。どうにかせねばならない！と思ったことは覚えているんだが…気が付いたらリアンと一緒に転がっていた」
「そうですか。…ありがとうございます」
私は深々と頭を下げた。
「でも、今後二度とあんな無茶はしないでください。私の心臓がいくつあっても足りません」
そう。あの時、坊ちゃんが転がり落ちてきたとき、心臓が押しつぶされるかと思ったんですよ。もう二度とあんな思いはしたくない。
「…だったら」
坊ちゃんはごく当たり前のように…。
「私にあんな無茶をさせないようにすればいい」
「……」
ああ…。なんて勝手なんでしょうか。でも、ごもっともです。
つまり、私にもっともっと強くなれとおっしゃるのですね？
承知しましたよ。坊ちゃん。

×　×　×

私の心臓はいつになくバクバクと高鳴っていました。
手には白い封筒。裏にはトレハン組合のロゴ。
私は一つ深呼吸をすると、その封を開けました。

「坊ちゃん！！！」
もはや走っているとも言える早足で坊ちゃんの部屋へ駆け込む無礼をお許し下さい。
「どうした？リアン」
「前回のクエストの結果通知が来ました」
「…来たか」
「はい！！」
私は通知の紙をゆっくりと開き、坊ちゃんに手渡す。
「おめでとうございます。見事Ｂ級に昇級です！」
坊ちゃんは満面の笑みで、
「当然の結果だな」

「はい」
でも、その数秒後に坊ちゃんの顔は曇るでしょう。
「…え？　リアン、お前…」
「ええ。私はこの度 A 級に昇級いたしました」
「ちょ…B＋を飛び越えて…ってどうしてだ？」
「実は今まで昇級を断っていたんです」
「…え」
「でも坊ちゃんはあの時、『すぐに追いついてみせる』とおっしゃってくださいました。そのご立派な決意に嘘なんてつきたくありません。ですから今回飛び級して」
「まさか、本当は A+だと言うことはないよな？」
「……」
…さすが坊ちゃん鋭いですね（笑）
「…いや、そんなことはありませんよ？　さあ、坊ちゃん、次のクエストの準備をしましょう」
「今なんか変な間があった気がするんだが…」

坊ちゃんのベッドの枕元に置かれた絵本の数々。幼い頃何度も読み聞かせさせていただいた絵本たち。そのラインナップが冒険ものや海賊ものなのが私のチョイスだと言うことは坊ちゃんの知らない事実です。いつか坊ちゃんと一緒に冒険にでることが私の幼い頃の夢だったことは誰にも打ち明けたことはありません。完璧なる計画的策略ですから。
え？　どうしてそこまで坊ちゃんに入れ込んでいるかって？
そうでうすね。一言で言うと、一目ぼれですね。
あの時、あのプニプニした手で人差し指を握られた時から―…
私は坊ちゃんにゾッコンなんです。メロメロなんです。
え？　もっと言葉を選べ？　いいじゃないですか。だって本当なんですから。
ただ、過保護すぎた自覚は大いにあります。厳しくすると言ったものの、まだ甘すぎていることも重々承知しています。可愛い子に旅させてもいいですが、やはり後はつけてしまいますよね。
…いや、仕方ないんですよ。こればっかりは。
私は私のやり方で、坊ちゃんに仕えるだけです。

「おいリアン」
自分の中で語りすぎていたら、坊ちゃんに不審がられてしまいました。ちょっと心の声は黙ります。
「どうしました？坊ちゃん」
「それ。…その坊ちゃんという呼び方。もうやめにしないか？」
「え？」
「もう私も 20 を越えた。大人の仲間入りをしたんだ。坊ちゃんと呼ばれるのは、少しこそばゆい」
「…なるほど。では何とお呼びすれば？」
「ボニートでいい」
「…呼び捨てはちょっと…」

「いいじゃないか。一度呼んでみてくれよぉ」
「…ボニート……坊ちゃん。ああ、ダメです！！」
「惜しい！！」
「…では、これはどうでしょう？」
「なんだ？」
「ボニートの愛称として『ボっちゃん』とお呼びするというのは？」
「……」
まあ…、いくら坊ちゃんとは言え、そんな子供だましが通じるわけありませんよね。
撤回しようとしたその時、
「なるほど！！それはいいな！リアン！」
大きな目を更に大きく輝かせて坊ちゃんはおっしゃいました。
……反則でしょう。なんなんですか。この可愛い生き物は！！！！！！！
「では、これからもよろしくお願いしますね。ボっちゃん！」
「もちろんだ。リアン」

今日もルーカス家は平和です。甘ったるいくらい平和です。
現場からは以上です。

SpinOff- 01.　fin.